

**英知を結集した原子力科学技術・人材育成推進事業
戦略的原子力共同研究プログラム
事後評価総合所見**

研究課題名：福島原発事故による生物影響の解明に向けた学際共同研究 研究代表者（研究機関名）：鈴木 正敏（東北大学） 再委託先研究責任者（研究機関名）：福田 智一（岩手大学） 再委託先研究責任者（研究機関名）：中島 裕夫（大阪大学） 再委託先研究責任者（研究機関名）：遠藤 暁（広島大学） 研究期間及び研究費：平成28年度～平成30年度（3年計画） 44百万円		
項 目	要 約	
1. 研究の概要	旧警戒区域内およびその周辺に棲息する外部内部複合長期被ばくの野生ニホンザル試料を収集し、被ばく線量推定による物理学的指標と、生体試料を用いた解析による生物学的指標の相関を調べ、東京電力福島第一原子力発電所事故による放射線被ばくの生物影響を検討する学際共同研究を推進する。また、福島原発事故後に環境中で発見された不溶性放射性セシウム微粒子による細胞影響について検討することを目的とし、以下の研究開発を行う。 1) 野生ニホンザルの被ばく線量推定 2) 野生ニホンザル試料を用いた影響解析 3) セシウムボールによる細胞影響評価	
2. 総合評価	A	・ 歯のサンプルを用いたESRによる線量評価法を確立し、従来の検出限界（200 mGy弱）を約40 mGyと大幅に改善したこと、また、野生ニホンザル278匹のサンプルの積算内部被ばく線量、異なる生活形態である地表面モデルと樹上活動に対する積算外部被ばく線量に基づいた全積算被ばく線量を推計した意義は大きい。 ・ マウスを用いたセシウム投与実験を行い、臓器内放射能測定による被ばく線量評価ならびに血漿タンパク質の解析による放射線応答の状況を調べて比較する等、実験的検証の基礎研究を並行して進めている点は評価できるが、ニホンザルでの成果とマウス実験による成果のより緊密な議論・連携を通して、動物個体における生物影響の理解に繋げて欲しい。 ・ 個々の研究項目を着実に実施し、総合的には土壌から回収したセシウムボールを対象とした解析に加えて、模擬粒子を実験的に生成して細胞影響の解析に道を開いた意義は極めて大きいなど評価できる。 ・ 有害鳥獣として、自治体（福島県、新潟県）から提供された捕獲野生ニホンザルを対象とすることで、霊長類において臓器中の放射能測定による被ばく線量を評価する目標が達成されたことの意義は大きい。

	S) 特筆すべき優れた成果があげられている A) 優れた成果があげられている B) 相応の成果があげられている C) 部分的な成果に留まっている D) 成果がほとんどあげられていない
--	--